

愛隣館研修センターニュース

〒612-8141 京都市伏見区向島二ノ丸町 151 Tel:075-621-3849 Fax:075-621-1579
E-mail:airinday@sunny.ocn.ne.jp http://www.airinkan.net 振替:01020-5-39321
編集発行所:社会福祉法人イエス団 愛隣館研修センター 発行責任者:平田 義

90号

「あれから3年、福島は今…」

東日本大震災から3年が経過しようとしています。しかし、今もなお、福島第一原発の爆発事故による放射能汚染で、住み慣れた家を追われ帰る見込みがない人、放射能の恐怖により避難を余儀なくされた人、放射能に怯えながらも福島で生活を続けなければならない人など、多くの人が苦渋の中での生活を強いられております。そのような人たちの苦しみに思いを寄せ、「福島」を私たち自身の課題として捉えていくための特集を組みました。それぞれのお立場から「福島」を語っていただいております。ご一読ください。



「帰りたい！でも帰れない…」

福島県いわき市より京都の向島に避難してこられ、33世帯99人の方と共に、国と東京電力に対する損害賠償を求めて提訴された高木久美子さんとその娘さんで中学校2年生の悠季さんからお話をうかがいました。

Q:地震が発生した直後のお話を聴かせていただけますか。

高木久美子さん(以下:母):私は、いわき市小名浜でスーパーのレジ係りの仕事をしていました。立ってられないくらいの酷い揺れがしばらく続きました。揺れがおさまった後、近くの塾に通っている長女の無事を確認して、店に戻りました。すると、店長から店の片づけをして各自持ち場に戻るよう指示をされました。その時、同僚の一人が、携帯電話のワンセグでテレビを観て、津波がすぐ近くまで押し寄せていることをみんなに伝え、大急ぎで屋上に避難しました。

高木悠季さん(以下:娘):私は、学校が終わって公文教室でプリントをしている時でした。大きな揺れを感じたので慌てて机の下に隠れました。棚が倒れてきたりしてとても怖かったです。揺れがおさまってから外に出てみると地面が割れていて水が噴き出している状態でした。教室の外にいる時にお母さんが来てくれました。お母さんも無事でホッとしました。10分後に津波が来るかもしれないということだったので、お母さんが、おばさんに車の手配を頼んで、妹

とおばあちゃんと一緒に山の上にある学校に向かいました。お母さんは仕事に戻らなければならないとのことでしたので、とても心配でした。

Q:震災後の生活はいかがでしたか

母:私たち夫婦と二人の娘たちと当日の夜に自宅に戻りました。家の中はぐちゃぐちゃでした。水も止まっていたので、食料のことも含め、これからの生活がどうなるのか不安が一杯でした。日々の生活に追われていたことと、震災後3日間はスーパーの仕事が休めなかったのも、原発がどうなっているかの情報もしっかりとはつかんでいませんでした。

ただ、友人から「原発が危険だから早く逃げて」というメールが入ってきていました。放射能汚染のことを強く意識したのは、3月14日3号機が爆発した時からでした。

娘:その日は知り合いのおうちが水が出るのでお風呂に入らせてもらいに行った日だったんです。放射能が流れ込んだことなど何も知らされていなかったのも、みんなマスクもつけずに外出してしまったの。

母：いわき市は4月に安全宣言をし、4月5月はパンと牛乳の給食でしたが、6月より給食が始まると聞き、地産地消の学校給食は子どもの内部被曝が心配で子ども2人をおばあちゃんに頼み秋田へ避難させました。それからの9か月間は秋田といわきを往ったり来たりしていましたが、子どもたちと離れ離れの生活は、私たちにとってとても辛い日々でした。空間線量は下がっているといっても土壌汚染がある中で、子どもたちをいわきに戻すことはできないと考えていました。悩みに悩んだ末に、自分も子どもたちと一緒に京都に避難することを決断しました。そのことで、主人とは大ゲンカもしました。主人の親からも「福島に残って立派に子どもを育てようとしている親もいるのに、あなたは何故それができないか」とも言われましたが、この状況でどうやって立派に育てることができるのかわかりませんでしたし、福島に残ることが立派とも思えませんでした。

Q:京都にいられてからの生活はいかがでしたか

母：京都に来たのは2年前の3月29日でした。天理教の宿舎に2日間泊めていただいたのですが、食事の心配もいらず、震災後初めてゆっく

りとできました。

娘：私はインフルエンザでしんどかったんだけどね。
母：向島に引越してきて、何より嬉しかったのは、1年ぶりに洗濯物を青空の下で干せることでした。心が晴れ晴れとし、穏やかになってきました。ただ、向島に来た当初は、福島からの避難者がいる事は知っていましたが、中々会える機会もなく孤立した状態でした。そこで、避難された人たちが孤立しないで、楽しくつながってほしいとの思いで、「向島笑顔つながろう会」を立ち上げ、定期的集まりを持っています。

Q:今、一番みんなに知ってもらいたいことは何ですか

母：実は、私たち家族で、京都での一斉訴訟の原告となり国と東電を相手に裁判を起こしました。この裁判を通して、私たち避難者の思いを多くの人に知って欲しいと思います。また、日本の社会が原発に頼らず、人の命が大切にされる社会になることを望んでいます。どうか皆さん、つながった手を離さず私たちと共に寄り添い励まし合いながら歩んでいただきたいと思います。

(聞き手：平田義)



【参加記】 障がい児者の地域生活支援を考える 伏見区民のつどい・2014
人のつながりと再興 ～東日本大震災から体感したこと～

2014年2月15日(火) 伏見区総合庁舎にて

2008年から毎年開催されている「障がい児者の地域生活支援を考える 伏見区民のつどい」では第6回目となる今回、東日本大震災(2011年3月11日)後、人と人との繋がりを生み出し、命を守る活動を続けている御二方からお話を伺った。

四條拓哉さん(社会福祉法人福島県福祉事業協会 相談支援相馬事業所 相談支援アドバイザー)は、障がいのある当事者、ご家族の相談に乗り、福祉サービスの調整等の仕事をされている。「震災前は、住み慣れた土地で、ご自身の力や家族の支えで福祉サービスを利用せずに生活をされていた障がいのある方々の生きづらさが、避難生活や、環境の変化により顕著になった」と話される。

震災後、教育・福祉の分野では、支援者の多くが被災したため担い手が減り、事業所が閉鎖せざるを得ない状況の中、福祉サービスを求める声は急激に高まった。これまで経験したことのない内容の相談も急増し、現場を支える中堅の職員

の心理的・身体的負担はとても大きいという。そんな張り詰めた状況ではあるが、「法人の壁を越えて地域全体でネットワークを作り、人材育成の研修や、社会資源を展開していきたい」と抱負を語られた。



原発城下町双葉町にある看板。住まうことがかなわない今、「原子力正しい理解で豊かな暮らし」の文字もむなし。

西山祐子さん(一般社団法人みんなの手代表)は、「京都には、子どもの命と安全を守るために避難してきた」と、放射能による子ども達の心身の健康や育ちに対する母親ならではの不安を率直に話された。

震災後、京都府には約1000名の避難者が移住し、その多くが母子避難者であるという。孤立しがちな避難者を繋ぐためにネットワークを作り、避難者・被災者に寄り添いながら支援者や支援団体と共に「家族再会プロジェクト」やカフェの運営等の活動を続けている。

福島・京都とそれぞれの活躍する場は異なるが、福島と他の地域の人が「支援する・支援される」の関係ではなく、Win - Winの対等な関係でありたいと

いうお二人の姿勢は共通している。

四條さんは、京都市内の複数の事業所からの応援派遣に感謝を述べられ、「今後は災害時の対応のノウハウを他の地域に伝えていきたい」と語られた。西山さんも、「自主避難者をもてなしてくれた京都に恩返しをしたい。京都の特産品を活かした新たなビジネスを展開したい」という思いを胸に、準備を進められているという。

政策や対応のまずさが生んだ人と人との軋轢・格差など、新たな課題も問題視される中、それぞれの立場や視点・考えがあるということを強く感じた。福島の問題を自分たちの問題として感じ、それぞれの立場でできることを考え続けていきたい。(福野由記)



「冬きたりなば 春遠からじ」

多くの自然に囲まれた福島県浜通りの山あい川内村があります。

2011年3月11日に起こった福島第一原発事故により、30キロ圏域にあった川内村は全村避難を行いました。その後の避難区域の見直しの後、警戒区域が解除された川内村は2012年1月に帰村宣言を行い、同年4月に行政機能が戻りました。

多くの課題や不安を抱えながらも、復興に向けて積極的に歩みを進められておられます。

村外に避難していた住民は徐々に戻って来ておられ、2013年10月には人口(村に住民票を置く人口)の50%を越えたとのことですが、若い方の帰村率は依然低く、高齢者の方の割合が多い状況です。

村に戻ってこられる方の中には、避難先の生活でストレスを抱える高齢者の方や障がいのある方もおられます。

川内村には元々障がいのある方の居場所がなく、避難先から村に帰ってきてても行き場所がなく、生活のしづらさを抱えておられました。

その様な状況の中、県の相談支援事業や村の保健福祉課のお働きの元、障がいのある方が集える場として、サロン「どじょう」(事業実施 NPO 法人 Jin)が2013年6月に立ち上がりました。

事業は立ち上がりましたが、携わられる職員の人手不足や経験不足等の不安を抱えながら取り組まれておられることから、開所以降、関西にある福祉サービス事業所等の有志の方々が交代で現地に赴き、協働さ

せていただきながら応援活動を続けさせていただいております。私も1月に短期間ですが、お手伝いに参加させていただきました。

現在は4名の方が利用されており(うち1名は長期休暇時のみ)、さをり織りや咲き織りといった創作活動を行われながら過ごされております。また織り上がった布でマスクやポーチ等を作られ、販売等で展開されていかれる予定です。

集われている利用者みなさんは笑顔に溢れ、やる気を持って日々取り組まれておられます。

私が普段暮らしている地元の生活との違いの一つに、地域内の人の繋がりが深いという点を感じられました。村内には昔からの生活の中で育まれてきた人と人の繋がりが今も多く残っています。こうした地域性を生かすため、サロン「どじょう」は障がいのある方が集う場のみならず、村内の高齢者の方も集え、地域で支え合えるコミュニティの場を目指されています。

それまでに無かった事業という新たな試みに不安や戸惑いを抱えつつも、地域に根ざした拠点作りに積極的に取り組まれている姿にふれ、お手伝いさせていただきながらも逆にこちらが応援された様に感じます。

芽吹く季節を迎える「どじょう」をこれからも影ながら支えていければと思います。(安野友喜)

3.11メモリアルキャンドルinむかいじま 2014

～慰霊と復興への願いをこめて～

3月11日の震災から3年。亡くなった方々へのご冥福と被災地の復興を願い、3月8日18:00にキャンドルを灯します(向島ニュータウン商店会京都銀行前広場にて)。また、以下の企画が(向島ニュータウン京都文教マイタウン向島)行われます。ぜひご参加ください。

①「福島のがた〜3・11で時間の止まった町〜」三春町出身写真家飛田晋秀 写真展
3月4日〜11日 10:30〜16:00 (8日のみ 19:00)

②「逃げ遅れる人々〜東日本大震災と障害者〜」DVD上映会(74分)

〈第1回目〉3月7日 19:00〜20:30 上映会のみ

〈第2回目〉3月8日 13:30〜16:00 防災に関する意見交換会【お話】鈴木絹江さん

③「福島原発事故3年目 私たちの思い」かたりあいの時間

3月9日 14:00〜16:00

【お話】石田紀郎さん(市民環境研究所) 齋藤夕香さん(さぼーと紡ぎ〜 tumugi〜)
長谷川沙織さん(笑顔つながろう会)

ご支援ありがとうございました

今年度も多くの皆様に支えられて活動を続けていくことができました。

今後ともよろしくお願い致します。

感謝を込めてお名前を載せさせていただきます。

愛隣館研修センターを

支えて下さった方々

飯田二美,奥田美代子,奥間早登子,奥野美奈子,大谷優子,柿本真介,神戸萌子,金山秋義,河原崎美恵子,寒竹美穂子,君村千代子,岸佳津子,木村美由紀,木村耕,北園由希子,菊地義則,五藤薫子,沢井,櫻恵子,佐々木智子,酒井由喜,塩谷幸代,田中晁・千栄,崔恩京,刀根史恵,友田芙美子,中村直子,西村美枝子,菱田万里子,福田尚子,堀尾恵,前川有紀,松井知恵,松野正信・清美,壬生輝子,道野大輝,村川知子,恵ヒロ子,森弘・雄子,安野喜仁,優美,山崎希充子,藪内みのり,秋山幸美,池添素②,今井美令,上野政治,梅村貞造,梅田健也,織田雪江,川尻良雄,金森弘一②,加治木政子②,川中大輔②,川西大祐,川田よしみ,喜多明子,北野井一恵・智恵子②,岸野新吾,木村拓貴,黒田絢,小久保正②,上内鏡子,後藤一志,近藤孝子,坂本紘輝②,笹井健匡,清水真二・元介,菅井裕行,菅令子,杉原輝明,竹内富久恵②,竹下佳貴,田村早千枝②,高柳富夫,高橋秀幸②,滝口宣,千葉宣義,寺本喜宥,刀根史恵②,中西静子,中西仁美②,難波幸矢,中田正道・長井美歌,丹羽克吉②,野島正

光・共子,服部昭,浜口雄二,服部忠,藤田早紀②,富士定夫②,本田桃子,朴実・清子②,宮本真希子②,村田稜太②,村瀬義史,森田和子②,森本芙紗子,藪中翔太・利光,山形滝子②,山野保子,匿名,愛之園保育園,市川三本松教会,神戸教会,石橋教会,一麦保育園,軽井沢追分教会,京都御幸町教会,京都丸太町教会,ケアハウス樟葉新生園,甲子園二葉幼稚園②,しえあーど,丹波新生教会,同志社高等学校,同志社中学校・高等学校宗教部木村良己,西宮一麦教会,原宿教会,枚方くずは教会②,ぶどうの木保育園,みどり野保育園,友愛幼児園,赤井麻美,足立こずえ,秋山眞一郎,猪ノ口愛子・敬幸,魚木アサ,金岡耕祐③,北野井一恵,岸野新吾,喜多明子,清水充浩,篠原文浩,菅令子,高木春美,富永誉志幸,土井淳平,富増献児,中井二美②,中垣陽子,根本陽子,橋本求,島田知佳,平井啓之,古川城行,藤田三郎,溝口智之・久美子②,恵ヒロ子,安野喜仁・優美③,NAの会, Pink cherubic,赤とんぼ(小中・宮坂・寺田・福田),希望の家れいんぼう,新婦人の会,住み良い向島ニュータウンを作る会・増田みち子,世光保育園,空の鳥会,中国帰国者日本語教室,二

ノ丸民生児童委員協議会,花つむぎの会,ペンギンの会
井桁光,太田正人,窪田由美子,小林徹男,笹原翔,佐藤雅裕,四方真紀子,下野可奈恵,篠原文浩,杉本基晴,田中涼子,田中仰,辻早苗,出口剛史,永江孝志,長谷川円香,平田義,福野由記,野島共子,林田吏里,馬嶋亮太,南艶,森拓平,森口康弘,安野友喜,山口洋介,横山利明
(2,912,522円 217口)

フィリピン救援募金

穴田篤,秋山眞一郎,井桁光,内山慎吾,大西悠貴,岡崎スパッタラー,北野光晴,佐藤雅裕,田中晁・千栄,辻早苗,出口剛史,匿名,福野由記,藤田有紀,松本圭子,村田幸寛,森田学,森大樹,安野友喜,柳本真太郎,柿本真介,金田有希,桜屋敷美紀,清水充浩,藤谷まりえ,小谷達矢,遠藤誠治,大林爽香,田中仰,モンコンヨンウィラヤ,山本有起奈,後藤都子,小林徹男
(33口 65,000円)

2014年2月28日現在 敬称略

尚、記入に際しましては万全を期しておりますが万が一記載漏れがありましたらご一報ください。

☆お知らせ☆

▽愛隣館研修センターは、6月27〜28日を休館日とさせていただきます。

★編集後記★

▽考える機会の多い年でした。▽11平和学習会での「ハンセン病」の学びや、被災された方たちの語りの中で、考えの浅はかな自分に気が付かされることが多々ありました。▽出会うことを恐れず、語り合い、考えることを続けたいと思います。

▽今年の一月に福島に行かせてもらった▽通行許可証を発行していただき川内村から富岡町、大熊町、双葉町、浪江町を抜けて南相馬市に入った▽国道の号線沿いのお店はすべて閉店している▽住宅街に足を踏み入れたのが、まるでゴーストタウンのように静まりかえっている。▽ここは帰還困難区域や居住制限区域などの被災後三年が経過した指定されている▽経済産業省の統計では、約三万世帯、八万人がその対象となっており▽放射能汚染により帰りたいくても帰ることができない▽△周辺自治体で避難してきている方々と地域住民との補償金をめぐる軋轢がうまれていくという▽弱くされた人がさらに弱いものさしたく▽人として生きる▽自らの課題として▽福島とつながり続けていくことが求められている(ひ)